

【試し読み用サンプル】

Mr. ムムリクを待ちながら」

作 ひきだ愛音

登場人物…

広海

客／高原

男／加藤

かおり

舞台設定

喫茶店「ムムリク」の店内。

出入り口は二つ。上手側のドアは店の入り口。開閉すると揺れて鳴る小さな鐘が付いている。

下手側、カウンターの向こうは小さな厨房に続いており、観客からは見えないが、二階へ続く階段と勝手口があり、外界と繋がっている。

この店が他の喫茶店と違うのは、店内の壁という壁に、写真が貼られていること。写真は全て景色。人は写っていない。カウンターの脇に、黒い書類棚がある。その上には額に入った写真がある。この店で唯一、人物を撮った写真である。小学生くらいの女の子が写っている。

【第一場】

カウンターに、一人の男が座っている。

客 何の変哲もない街の、寂れた商店街の隅で、時間に置いてけぼられた店。…ここに初めて来た正直な印象は、それだった。…ここは居心地がよかった。この席に座って、広海さんの淹れるコーヒーを待つ間、頭の中でこっそりあいつに呼びかける。この時間が好きだった。「柴田。元気か？俺の方は順調。今じゃすっかり一般人になりすまして、普通に生活している。でもお前なら否定するんだろうな。空国旅して原稿書いて食いつなぐなんて、普通の生活じゃない』って。だったらお前はどんなだ？…あのオヤジ、喫茶店やってたんだな。お前、いつから知ってた。なんで俺に黙ってた。お前には、訊きたいことだらけなんだ。」

広海が出てくる。コーヒーカップを持っている。

広海 おまたせしました。いつもの。

客 ブレンドコーヒー、ミルク大目。ありがとう。

広海 どうしたの？にやにやして。

客 いや、いつもの「って言って注文できるのって、いかにも常連っぽいじゃないですか。俺もついにムムリクの常連か！」って思ってる。

広海 ここ最近、よく来てくれてるじゃない。

客 そう？こつちに着いたのが今月の頭で…まだ3回しか来てないと思うけど。

広海 3回も来れば十分。立派な常連でしょう、

客 認定？

広海 認定。

客 よっしゃー！

広海 そんなに嬉しい？

客 まあね。行きつけの店があるって、なんかこう、天人の男「って匂いがするでしょう。

広海 そう？

客 しません？

広海 大人の男っていわれると、ねえ。バーとかならわかるけど。

客 バーか。隠れ家みたいな店？

広海 そうそう。地下にあるようなね。

客 重い鉄のドアを押し開けて入る、みたいな？（急に良い声で）マスター、いつもの」

広海 がしこまりました」

客 俺の相棒、バーボンのロック。グラスを片手でくるくると回し、まあるい氷が中でカランーン！」みたいな？

広海 うち喫茶店だからね。バーボン置いてないし。

客 いいんですよ。コーヒーだって充分大人っぽいじゃないですか。それに俺、ロック飲めないし。

広海 弱いのか？

客 酒がっついていうか、お腹がね。

広海 コーヒーは？大丈夫？

客 ええ、ミルク入れれば。頑張っつて飲める程度までは克服しました。

広海 そんなことで頑張んなくなつて。

客 いいの！ 天人の男」になりたかつたんですよ俺は！それに俺持つてないし。

広海 何を？

客 行きつけの店。あんまり同じ店に通つたりできなくて。

広海 おうちの近所とかは？

客 近所ねえ。そもそもおうちに全然帰つてないから。

広海 どれくらい？

客 最後に帰つたのは、去年の7月…？

広海 じゃあもう一年帰つてないんだ、

客 そういうことになるか。仕事柄、しよっちゅういろんなトコ回つてて。

広海 いろんなトコ？

客 日本全国。たまに外国も。

広海 へえ。どんな仕事？

客 ルポライターですよ、フリーの。

客、広海に名刺を渡す。

客 元々はブン屋だったんですがね。最近は旅行雑誌なんかにちよいちよい書かせてもらつてます。

広海 高原…シジュン？

客 アツシです。どうぞ「轟原」に。

広海 これもらつていいの？ありがとう。

広海、カウンターを出て名刺を書棚の引き出しにしまう。

広海 じゃあこの辺にも取材で来てるわけ？

高原 ええまあ。取材っていうか、ネタ探しに。

広海 最初から決まってるわけじゃないんだ？

高原 ええ。今は放浪記シリーズ書いてて。行った先で出会ったものを書くんですよ。ですすね、ここも書かせてほしいんですが、どうですかね。

広海 ここ？

高原 はい。この土地の締めくくりの章で書きたいって、ずっと思ってたんですよ。

広海 書くことなんか無いでしょう、別に。ご当地名物とかあるわけじゃないし。

高原 んなのはいいですよ。そういうのは他の場所でも、ね？ここにはこの魅力があるし。

広海 ここの魅力？

高原 喫茶・ムムリク！その店は町の片隅にひっそりと佇み、旅人を待っていた。この小旅行に疲れた筆者を、「

広海 小旅行？

高原 俺は長旅だけど、読者は小旅行のつもりで読んで。読者目線で書かないと。続けますよ…「この小旅行に疲れた筆者を、店のマスターは母のごとき穏やかな表情で迎え入れる。マスターの淹れる水出しコーヒーの芳しい香りは郷愁を誘い、また静かで落ち着いた店内は、まるで時間が止まったかのようなようである。」「…どう？書き出しはこんな感じで。

広海 饒舌ー。でも、ちよつと、

高原 だめ？

広海 陳腐かなあ。

高原 陳腐？

広海 陳腐っていうか、普通？まあ、そもそもうちが普通の店だからしょうがないんだけど、ちよつと気になるのは…

高原 ど「ど」ど「ど」？

広海 まずね、「マスター」って呼ばれるのはちよつと。

高原 嫌？

広海 っていうかね。このマスターは別にいるから。

高原 そうなの？

広海 そう。マスターも今、ちよつとした旅に出ててね。

高原 旅？

広海 そう。私は彼が帰るまでの、店番みたいなものかな。

高原 店番、へえ。いつから？どれぐらい？

広海 どれぐらいだと思っ？

高原 うーん…旅って言うからには、観光旅行じゃなさそうだな？一ヶ月以上？

広海 そうね。

高原 もつとか。店を仕切ってる雰囲気も、ずっとここにいたって感じた。1年？2年？

と、厨房の奥でドアの開閉音。広海、厨房の奥をのぞく。

広海 あ…(厨房の奥に向かって)おかえり。

かおり (奥から声)お客さん？

広海 うん、そう。

かおり (奥から声)着替えたら手伝う。

広海 大丈夫、一人だから。夕飯は？鍋にカレーあるから。（高原の方を振り向き）ごめんね、なんだっけ。

高原 娘さん？

広海 みたいなものかな。

高原 みたいな？

広海 （呟くように）今日は早いな…

高原 学校？

広海 ううん、もう成人。会社近いから。

高原 実家通いか。…会ってみたいな。

広海 え？

高原 広海さんの娘。

広海 別に似てないよ、遺伝子ちがうから。

高原 マスターの娘ってことでしょ？でも喋ってみたいよ。

広海 どうして？

高原 常連だもん。店の人全員と仲良くないとね、常連は。お願い。

広海 わかった。（奥の二階に向かって）かおりちゃん、やっぱりちょっと降りて来てくれる？

高原 （奥に向かって）急がなくていいよー！

広海 …あと、さっきの続きだけど。

高原 うん？

広海 静かで落ち着いた店内」だっけ？喫茶店ってだいたいどこも 静かで落ち着い』てるでしょ。

高原 あ、そうか。

広海 それに、うち水出しコーヒーじゃないんだけど。

高原 え！

広海 普通にドリッパーですけど？

高原 マジで？

広海 マジで。

高原 てつきり水出しかと…

広海 水出してアイスコーヒーのやり方じゃなかった？

高原 わかってないなあ。通の店はね、水出しをわざわざ湯銭して出すんだよ、
香りを壊さないように。

広海 そうなの？

高原 らしいよ。美味しんぼにそう書いてあった。

広海 漫画か。

高原 このコーヒーもむっちゃいい香りじゃない。

広海 それ、私の腕を褒められたって解釈でいいのかな？

高原 褒めます褒めます、いくらでも！ムムリクのブレンドコーヒーは芳醇で
マイルド！飲みやすくってコーヒーが苦手な人間をもたちまち虜にする
だろうー！」

広海 やっぱり、コーヒー苦手なんだ。

高原 あ、いや、それは…。とにかく、飲みやすいのは本当。

広海 ありがとう。

厨房の奥から、かおりが顔を出す。

【執筆当初を振り返って】

古びた喫茶店のお話を書いてみたかった」というのと、「ここにいない人を思い浮かべる」ということを書きたくて書いていた…と思います(おぼろげ)

続